

第1回（仮称）仙台市教育構想2026検討委員会議事録

日 時	令和7年5月29日（木） 18:00～19:58
会 場	仙台市役所上杉分庁舎12階 教育局第1会議室
出席委員	野口和人委員長、本囧愛実副委員長、秋山一郎委員、遠藤克宏委員、大曾根学委員、嘉藤明美委員、幾世橋広子委員、越坂由美委員、菅澤美香子委員、菅原弘一委員、堤祐子委員、松田道雄委員、三浦和美委員、若島孔文委員（14名）
欠席委員	なし
事務局	教育長、副教育長、教育局次長、次長兼総務企画部長、次長兼学校教育推進部長、教育人事部長、教育人事部参事、学校教育支援部長、学校教育支援部参事、生涯学習部長、参事兼総務課長
担当課	教育局総務企画部総務課
次 第	1 開会 2 教育長挨拶 3 委員紹介 4 委員長・副委員長選出 5 委員長・副委員長挨拶 6 検討依頼 7 議事 （1）委員会の運営に関する事項について （2）「（仮称）仙台市教育構想2026」の策定について （3）本市の教育をめぐる現状について （4）その他 8 閉会
配付資料	1 （仮称）仙台市教育構想2026検討委員会 委員名簿 2 （仮称）仙台市教育構想2026検討委員会設置要綱等 3 （仮称）仙台市教育構想2026検討委員会の運営について（案） 4 （仮称）仙台市教育構想2026の策定について 5 本市の教育をめぐる現状について 6 総合教育会議における主な意見について

1. 開会

2. 教育長挨拶

○天野教育長 仙台市教育長の天野でございます。

お忙しいところお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。検討委員会の開会に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、皆様には日頃から仙台市政、そして仙台市の教育に多大なるご貢献をいただきましてありがとうございます。感謝しております。そして、本検討委員会の委員を引き受けてくださったということで、大変ご多忙の中で大きな決断をいただいたということについても、感謝を申し上げたいと思います。

本検討委員会は、今年度が最終年度となっております仙台市教育構想2021の次の構想について検討をお願いするというものでございます。

ご案内のとおり、本市の教育行政は、令和3年3月に現行の構想の策定を行いまして、「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環のもと、たくましく、しなやかに自立する人を育てます」という基本理念の下、6つの基本方針に沿って施策を展開してまいりました。

この間、社会情勢を見ますと、新型コロナウイルス感染症の影響により、様々な活動が制限されるという事態がございました。そして、一方では、生成AIの進展など、そしてグローバル化が一層進んできているということで、そうした変化の非常に激しい、そして将来が予測困難な世界環境だと考えております。その中でも、変化が早いということが、恐らくこの間の特徴であろうと考えております。

こうした教育を取り巻く環境につきましても、主体的、そして対話的で深い学びの実現のほかに、多様なニーズに応じた学習機会の確保、そして教職員の働き方改革、地域と共に歩む学校づくり、社会教育の推進など、取り組むべき課題、そしてテーマというのは多岐にわたっている状況でございます。

このような中、本市では、児童生徒が社会の変化に柔軟に対応するしなやかさや、多様な他者と協働して主体的に課題を解決する力が身につけられるよう、新たに、国際的な視点に立った教育、こうしたものにも取り組むことを決めております。

また、本市では古くから、社会学級、そして嘱託社会教育主事といった、地域に根差した市民の自発的な学びを生かす取組が行われておりまして、学術的にも仙台市は市民協働が進んだまちであると言われておりますが、こうした仙台市独自の取組というものが基盤にあり、それは仙台市の教育行政と深く結びついているものだと考えております。こうした仙台市の特色を将来にもつなげていくということが必要で、そうした意味からもこの構想の中でもご議論をいただきたいと考えているところでございます。

私ども教育委員会としましては、本市の歩みや社会の変化、そうしたものを捉えつつ、10年後、20年後の社会を見据えた施策を示す新たな教育構想、そうしたものを策定してまいりたいと考えておりますので、委員の皆様には、豊富なご経験と専門的見地から、また、それぞれの現場における生の声など、そうしたものを基に、様々な観点から幅広くご議論をいただければとお願い申し上げます。

そうしたことをお願い申し上げまして、私からの甚だ粗辞ではございますがご挨拶と

させていただきます。本日はどうかよろしく願いいたします。

3. 委員及び事務局職員紹介

資料1に基づき紹介

4. 委員長・副委員長選出

○事務局（総務課長）

資料2としてお配りいたしております（仮称）仙台市教育構想2026検討委員会設置要綱の第4条第1項の規定により、委員長と副委員長は委員の互選によって定めていただきます。

まず、委員長と副委員長の選出につきましてお諮りいたします。どなたかご推薦のある方は、挙手の上、ご発言をお願いいたします。幾世橋広子委員、お願いします。

○幾世橋委員

これまで仙台市の教育行政運営のためお手伝いをしてまいりました観点から申し述べさせていただきますと、現構想の前の計画である第2期仙台市教育振興基本計画の検討委員を務められたほか、仙台市発達障害児教育検討専門家チームでは委員長を務められるなど、仙台市の教育行政に対する広い知見をお持ちでいらっしゃる野口和人委員が委員長に適任かと思えます。

また、副委員長には、いじめ・不登校など引き続き対応すべき課題に関する深い知見をお持ちであり、仙台市いじめ防止等検証会議の副会長を務められている本図愛実委員が適任かと思えます。

○事務局（総務課長）

ありがとうございます。

委員長は野口和人委員に、副委員長は本図愛実委員をお願いしてはどうかというご提案でございますが、皆様、いかがでしょうか。

ー異議なしー

では、異議なしということで、野口和人委員に委員長を、本図愛実委員に副委員長をお引き受けいただきたいと存じますが、野口委員、本図委員、よろしいでしょうか。

ー両名とも了承ー

ありがとうございます。どうぞよろしく願いいたします。

5. 委員長・副委員長挨拶

○野口委員長

皆さん、こんばんは。委員長を仰せつかりました東北大学の野口と申します。

先ほどご紹介いただきましたけれども、仙台市のほうでは発達障害のあるこどもたちの巡回相談ですとか、専門家チームですとか、そちらのほうで委員長を長く務めさせていただいております。かれこれ四半世紀になるかというくらいの期間、続けております。

そのほかにも不登校関係、あるいはいじめ関係、いじめ関係のほうは県で委員長を務めたこともございますが、様々教育に関わることをさせていただいております、学校現場、あるいはその他の場所、児童館とか、そういった場所にもしばしばお邪魔させていただいております。実際子どもたちの様子を見ながら、そこで起こっている様々な課題とか先生たちのご苦労ですとか、そういったことを身に染みて感じているところでございます。

学校には、なかなか学校の授業に参加ができない、難しいとか、教室にいられないとか、いろいろな子どもたちがいます。そういった子どもたちをどう支えていくか、また、それ以外にも様々な子どもたち、本当に一人一人個性がある本当に素晴らしい子どもたちだと思いますが、そういった子どもたちが将来に向けて力を発揮できるように、この構想をしっかりとしたものにしていきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

○本図副委員長 皆様、こんばんは。宮城教育大学の本図と申します。

委員長を補佐して、議事が円滑に進みますように微力ですが頑張りたいと思います。本当に本日おいでの皆様が大変な専門性を持ってここにお座りになっておられるところ、私ごときなんですけれども、先ほどご紹介がありましたように、いじめ問題に関わるものがございまして、そこから教師のウェルビーイングとこどものウェルビーイングは相似形だと思っております、本当に微力なんですけど、先生方が働きやすい学校、教員養成におりますので学生たちが教職に就きたいと心から思えるように、その学校づくりに皆様と一緒に、お知恵をいただきながら、今回の件も勉強させていただくということで進めていけたらと思います。どうぞよろしく願いいたします。

6. 検討依頼

教育長から委員長に依頼状を読み上げのうえ手交

7. 議事

○議長（野口委員長。以下「議長」）

それでは、議事に入りたいと思いますが、初めに議事の第1、委員会の運営に関する事項についてお諮りいたします。

まず、会議の公開・非公開を決めなければなりませんけれども、事務局から案が示されておりますので、まず事務局からご説明をお願いいたしたいと思います。よろしく願いいたします。

○事務局（総務課長）

資料3に基づき説明

○議長 ありがとうございます。

ただいま事務局から説明がございましたように、仙台市においては公開が原則となっております。今後の仙台市の教育が目指す方向性という非常に重要な議論を行うこの会

であることから、どのように議論が行われているか、市民の関心も非常に高いものと考えます。

内容的に特に非公開として議論しなければならないようなことは恐らくないであろうと考えられます。ですので、私といたしましても、事務局の提案どおり、原則として公開として、審議の経過の中で非公開とすべき部分が出てきましたら、その都度皆様にお諮りをして決めていきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

－異議なし－

では、そのようにさせていただきたいと思います。それでは、会議につきましては原則として公開ということで進めたいと思います。

また、議事録の作成につきましても事務局の案のとおりでよろしいかと思いますが、いかがでしょうか。

－異議なし－

それでは、こちらも原案のとおり進めさせていただければと思います。

それでは、本日の会議の議事録の署名についてですが、名簿の順番から秋山委員にお願いし、次回以降、基本的には名簿順でお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

－全員了承－

それでは、よろしく願いいたします。

続きまして、議事の第2、次期教育構想の策定に当たって、その検討の進め方や基本的なスケジュールについて事務局からご説明いただければと思います。よろしく願いいたします。

○事務局（総務課長）

資料4に基づき説明

○議長 ありがとうございます。

ただいまの説明につきまして、皆様から何かご質問等はございますでしょうか。

○議長 小さい文字は大分見えにくくなっておりまして、本当はPDFで頂けるとありがたいのですが、難しいでしょうか。

○事務局（総務課長） 承知いたしました。

○議長 PDFで頂けると、拡大して見るできるので、ありがたいです。

○事務局（総務課長） 承知しました。他の資料も字の大きさなどには十分注意して作成したいと思います。

○議長 ありがとうございます。よろしく願いいたします。

○議長 何かほかに質問等ございますか。

それでは、先ほどご説明ございましたとおり、来年の1月頃までに教育委員会へ次期構想案の報告を行わなくてはならない日程になっておりますので、6回の会議で、効率的に審議を進めていかなくてはいけないかなと考えております。

私としましては、事務局からご提案がありましたように、事務局で素案等を作成していただいて、それを事前に委員の皆様にご確認いただいた上で検討委員会の場で議論をしていくのがよろしいと思いますが、いかがでしょうか。それでよろしいでしょうか。

—了承—

それでは、そのような形で進めてまいりたいと思います。

続きまして、議事の第3でございます。これまでの本市の教育をめぐる現状につきまして、こちら事務局からご説明をお願いいたします。

○事務局（総務課長）

資料6に基づき説明

○議長 ありがとうございます。

何かご質問等ございますか。

—質問・意見なし—

それでは、幾つかのご意見がこちらの総合教育会議において出されたということをお聞きしましたけれども、今後こちらで構想を練っていくに当たっては、やはりこれまでの施策を振り返りながら、課題や今後の重要施策を協議していくことはとても大事なことだと思います。委員の皆様がそれぞれ活躍されている場で感じられている課題や、これから考えていくべきこと等、そういったお考えがございましたらご発言いただければと思います。本日、第1回目の会議でございますので、短い時間とはなりますけれども、順番に、現在お考えになっていることをご紹介いただければと思います。よろしいでしょうか。

では、名簿順に1人3分程度でお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○秋山委員 鶴谷特別支援学校の秋山です。

特別支援学校に勤めているということもありまして、事前に頂いた資料で本市の現状

の（８）で特別支援教育というページもございまして、そこに特別支援学級在籍者と、あと、配慮が必要な児童生徒ともに増加傾向にあるというようなグラフがございました。こういった特別支援のこどもたちが増えているというのはいろいろなところで出されて久しいわけですが、私もいろいろ考えてみて、いろんな見方があるなと思うんですが、ある一つの見方でいくと、それだけ相談機関が整ってきた、あと、学校の学びの場としての障害のある子たちを受け入れる場の整備が進んできたということも言えるのかなと。あと、さらには、保護者や本人がそういう特別な学びの場で自分に合った教育を受けたいというような希望、これは特別支援教育に対する理解が進んできたというふうにも考えられるのかなと思っておりました。そういう意味では、やはりその思いとか希望、ニーズに応えられるように、さらに特別支援教育の質的な向上というのがこれからさらに必要ではないかなと思っております。単に障害のあるこどもの教育ということだけでなく、例えば教育のユニバーサルデザイン化を進めたりすることで、教育の質そのものが向上していくということも期待できるのではないかなと思っておりました。

あと、全体的なところを見ると、やはりすごく教育が抱える課題というのは多岐に及んでいるなと感じます。私も学校に勤めて40年弱になろうとしておりますけれども、この間、本当に学校が抱える、学校がやるべきことというのが本当に増えたなというのが実感です。そういう意味では、この多岐に及ぶ課題を単純に学校現場でさあやってくださいというのはかなり無理があるところもありますので、そういったところをどういうふうに整理していくかということも一つ課題だなと思っておりました。

以上です。

○遠藤委員 長町中学校校長の遠藤克宏と申します。よろしくお願いたします。

私は学校現場を預かる立場ですので、学校教育の面から、今後重視すべき教育施策や方向性というところで幾つか意見を述べさせていただきたいと思っております。

まず、1つ目は、現行の教育構想2021でもございましたように、学習指導要領の理念を具現化するということが求められていると思うんですが、現行の学習指導要領では、社会に開かれた教育課程を理念に掲げて、学びに向かう力の向上、それから主体的・多様的で深い学びの視点からの授業改善等、こういったことについて施策が示されています。次期教育構想については、その取組について学校現場の課題といいますか、例えば意欲を持って主体的に学びに向かうこどもと、それが難しいこどもがいて、そういった面での授業改善というところには苦勞している状況がやっぱりあるわけですね。このことだけに限らず、現状の様々な課題を踏まえたさらなる取組方針というものを示していく必要があるだろうと思っております。

あわせて、資料5の6ページに国の動向としてもございますように、次期学習指導要領改正に向けた検討というものもなされてきていますので、そういった最新の動向を見据えた学校教育の今後の在り方というふうなところについて、方向づけをする必要があるのではないかなと考えているところです。

それから、2つ目は、ICTを活用した授業づくりの今後の方向性というところです。1人1台端末を活用した多様な学び、それから個々に応じた学びというのは、大分実践が進んでいると感じています。例えば意見を集約したボードに他のこどもの意見を見て

自分の考えを見直したり、それから補強して発表したりということであるとか、それから学習の振り返りで従来のように用紙に文字で書くよりもキーボードで打つほうが断然文章量が増えてきて、学びの深まりというところも見てとれるかと思います。今後はこうした学び方の上に、個別最適な学び、それから協働的な学びのさらなる展開ということであるとか方向性というところが見いだせるとよいのではないかなと思います

3つ目は、国際的な視点に立った教育の推進についてでございます。このことについては、これまでも校長会等で、本市の環境であるとか、それから目指す方向性を基に国際的な視点に立った教育についての必要性、それから新教科の導入についての説明をいただいております。今度の新教育構想の5か年ですけれども、その間にこの国際的な視点に立った教育をどのように進めて、学校での学びをどのように行うのかということについて、やっぱり具体的にプランを示していただくようお願いしたいなと思っております。

ただ、学校の現状は、様々なことをじっくり取り組むという時間的な余裕はないところがございます、新しいことを積み上げるということになると、大きな負担になるというふうには考えております。例えばこれまでの自分づくり教育であるとか、それから防災教育等をどうするのかとか、授業の見直しがあるのか、これから精選するものがあるのか、これから重点化する取組とするのか、そういった観点からも同時に示していく必要もあるのではないかなと思っております。

最後、4つ目ですけれども、学校の働き方改革、先生方のやりがいについてでございます。先生方が教員としてやりがいを感じるということ、一番は児童生徒の成長を感じるということのような以前のアンケートの結果もございます。先ほどご説明もいただきましたように、資料の6の2、学校における働き方改革・魅力ある教職の実現について、内容をご説明いただきましたけれども、現場が疲弊して、やりがいや魅力が見いだせないというところはあるのですが、それでもやはり先生方はこどもの学びに最も近い存在として、日常、継続的にこどもと向き合って関わることで力を注いでいるからこそ、こどもの成長に心が動いて魅力や感動を味わうのだと私は思っています。先生方がやりがいを持ってこどもと関わっていくということは、こどもにとっても先生方にとっても成長していけるものになると思っておりますので、ぜひ先生方がこどもと向き合えるための働き方というものを重ねて、教育構想で示していく必要があるのではないかなと考えております。

未来あるこどものための教育構想でありますけれども、また、先生方が誇りとやりがいを持って仙台の教育に携われるような魅力ある教育構想であってほしいなと考えて、いろいろ話をさせていただければなと思っております。よろしく申し上げます。

○大曾根委員 私は仙台市PTA協議会の会長をしております大曾根と申します。

私の立場では、社会教育であったりとか家庭教育として、学校教育以外でどういった形でこどもたちの支援を行うか、また、PTAは私は大人の学びの場でもあると思っておりますので、そういった観点からこちらの資料を基に意見を述べさせていただきたいなと思っております。

特に気になるのは、社会全体でこどもを育てる環境づくりということで、こちらの課

題でもありますとおり、後継者不足や長年地域にいらっしゃる方々が中心となって活動されている。言い換えれば、入る隙間がなかったりですね。私は、地域連携や連携コーディネートとかの機会があるんですけども、やはりどこの地域に行っても、そのところでは出るのは後継者不足という言葉です。そういう点で、PTAのほうで積極的に関わっていただいたりとか、また、コミュニティ・スクールで一緒にその小学校の目標を立てたり、いろんな方々と我々の地域の教育はみんな考えていくというような、大人の自己肯定感を高めていくというのはすごく大切なことだと思いますので、この辺、引き続き進めていただいて、親の世代、また孫世代にとって、こういった形で自分の地域を盛り上げていけるのかというですね。それがいわゆる持続可能な社会のあるべき姿だと思いますので、そういった意味で親の背中を見せ続けるということをぜひ推進していただきたいなと思っております。

また、生涯学習につきましても、少し気になっていたのは、今までの生涯学習に関しては、大人の学びの機会を確保することは、すごくすばらしい発想だと思います。もちろんオンラインツールを使って居場所に限らない教育を行っていただくことは、すごくありがたいと思います。ただ、まだ少し抽象的な表現が多く、実際にこの学びの機会とはどのような学びが必要なのかとか、大人といっても壮年期から高齢者、いろんな世代があって、その世代に合わせて教育機会というのが違ってくると思います。社会ニーズに関しては日進月歩なので、去年学んだことがもしかしたら次の年には変化が激しくて通用しないこともあるので、この辺はスピード感を持ってやっぱり取り組んでいかなくてはならないのではないかと考えていますし、児童生徒が探究学習で培った学びの姿勢を仙台の地域で発揮する、すごくいい考えだと思いますが、これも具体的なものが少し欠けているような気がします。

私がとてもいいなと思うのが、スチューデントシティであつたりとか、学校教育以外の施設で学びを、実際に自分の将来を見据えた教育機会というものを体現する、これは全国に仙台を含めて4つしかないすばらしい施設だと思いますし、自分づくりの肝となるものだと思います。そういったものもあつたからこそ、資料にありますとおり、自分にはいいところがあるという、これは全国よりも中学3年生は比較的多い。そして、将来の夢や目標を持っていると回答した子たちも、小学6年生、これは全国平均より少し低いんですけども、中学3年生では全国平均よりも高い。つまり、小学生の頃に持っていた夢を継続できているという証拠でもあるのではないかなと考えますので、こういった自己肯定感を高める教育をぜひ仙台市率先して続けていただいて、モデルケースとして全国にどんどん広めていっていただきたいなと思っております。

私もそんなに具体的な話ができてはいないのですが、これから一緒に考えて、具現化して、いい教育ができればいいなと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○嘉藤委員 株式会社鐘崎の嘉藤と申します。委員の皆様方、皆様、ふだんから教育の分野で尽力されている方々の中で、たった1人、一般人が紛れ込んでしまったような、そんな少し戸惑いを持ちながらここに参加させていただいているのですが、私は、地域と教育というそんな観点から、皆さんと一緒に考えていけたらなと思ってます。地元企業の経営者という立場から、これからの教育の在り方について私が感じていることを二、

三お話しさせていただきたいと思います。

まず1つは、これからの教育は地域とのつながりが不可欠だと考えています。近年、首都圏に流出する若者がすごく増えているという現状があります。若い人材が地元を離れずに地域に誇りを持って働ける環境をつくっていくには、学校と地域企業がもっと連携して実践的な学びの場を提供していくことがとても大事ではないかなと感じています。

2つ目が、これからの子どもたちに必要なのは、正解のない問題に向き合う力かなと感じています。冒頭の教育長のご挨拶にもありましたけれども、本当に今、変化のすごく激しい時代ですし、なかなか先が不透明で見通すことができないという中で、私たちは事業を運営しています。AIが幾ら最適な答えを出してくれたりしても、やはり企業の現場はなかなかマニュアルどおりにいかないことばかりです。だからこそ、探究学習だったり、対話するという、そんなことがとても重要だと思いますし、答えのない問いに挑戦できるような教育、人としての力を育んでいくことが大事なのかなと思っています。

3つ目は、我々のような企業側がもっと教育に関わっていくことがすごく必要だと思います。もちろん職場体験であるとか出前・出張だったりとかインターンシップの受け入れなどで関わっていることもありますけれども、もっと主体的に企業に関わる、役割を担うような、そんな仕組みづくりが構築されるといいなと思います。先週の新聞でも、中体連の全国大会を民間企業が運営するという、支援に乗り出したという記事も掲載されていました。地元でも、私が所属している仙台経済同友会と仙台市で、中学校の部活動の支援をしようというプロジェクトが進んでいます。先生方の業務負担を軽減しようということと、子どもたちの部活動の質的な向上を図ろうという、目的があるんですけども、一方で、地域も元プロで活躍した方々がたくさんいて、その方たちのセカンドキャリアにもつながるということで、こういった連携を取ることはすごくいいことではないかなと私は感じていて、そういった事例をこの地域と企業が連携するような教育環境をつくっていく何か新しいモデルとして構築できていければいいのかなと思っています。

また、私も地元の大学を卒業しているんですけども、同窓会というものがありまして、その会長をしているんですけども、先日も、自分たちの同窓会での同窓会員の交流会だけではなく、若い人たちに何が残せるかということをもっとやろうじゃないかという話が出ており、大学と一緒に何かできないかということをもっと思っている方々がいるんですけども、具体的に何をどうしていいかわからないというので、すごくもったいないと思っています。もっと地域と教育という連携、これが何か仙台モデルみたいな形でつくれたらいいのではないかなと思っています。

そういったことで、やはり未来を担う子どもたちのために、地域ぐるみで育てていく、そんな仕組みをつくっていきながら、我々地元企業もその役割を担っていきたいと思いますので、この1年間、皆さんと一緒に学びながら議論をしていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

以上でございます。

○幾世橋委員 幾世橋広子と申します。今日は、少し喉の調子が悪くて声に張りがないの

ですが、頑張ります。

社会学級を、先ほど会長が言われたように四半世紀関わってきました。今後重視すべき教育施策やその方向性についてですが、私は、生涯学習の視点から今回この教育構想を考えていこうと思っています。

人生100年時代と言われてきて少子高齢化が顕著になってきた今だからこそ、学びが子どもたちを支える力になることや、ひきこもる高齢者をコミュニティに参加させるような活動をしていきたいと思っています。

働く人が増えたことで、教育を取り巻く環境が変化しています。ですので、働きながら学べる環境であったり、生涯を通じた文化活動の推進であったり、高齢者の生涯学習、女性の活躍に向けたリカレント教育が指標になっています。今後何を残していくか、伝えていくか、明確にしていくのが方向性になると思われます。AIなどに取って代わられてしまうのではないかと、ちょっと心配をしています。

今、私はほかに、みやぎの食を伝える会という会をやっています、県内の小学校や市民センターなどで郷土食を教えています。海に面し山もあるこのすばらしい仙台の風土というものを子どもたちに気づいてもらえたらなと思って、その活動をしています。平均年齢が70歳を超えているので少し危ないといえ危ないんですけれども、でも、何かすごくみんな生き生きとしていて、大河原のほうから来たりとか加美町のほうから来たりとかして、それで気仙沼に教えに行って一日へとへとになって帰ってきたりしているんですけれども、やっぱり子どもたちにありがとうと言われるとまたやっちゃうよねという感じでやっています。

そのように、いつでも学べることでできることが大事であって、多様性に対応できる人材の育成、それから、活躍できる環境整備、共通する施策になるのではないかなと思います。

教育構想2021は、おかげさまで何回も読まされる機会がありました。大変立派にできていたと思いますが、やっぱりコロナでできなかったことがたくさんあると思います。ぜひもう一度見直してみて、新しいものを付け加えていただければいいなと思っています。

以上です。ありがとうございます。

○越坂委員 仙台大志高校校長の越坂由美と申します。よろしくお願いたします。

私は、本市の現状を見て感じたことというところで、3点気になったところがありましたので、それについてのお話をさせていただきたいと思います。

まず、(1)番のところ、自己肯定感・将来への期待感というデータがあったんですけども、自分にはいいところがあると感じている生徒さんが、中学校3年生になったときに小学校6年生よりも上がっているというのが、実は私は少し驚いたところでした。自分が中学校3年生のときは、実は自分が嫌で嫌でたまらなかった時代だったんですね。自分にはいいところはないと思いつながら何か鬱々と過ごしていた記憶がありましたので、今の仙台市の子どもたちはこういうふうにいるということは、やはり自分づくり教育ですとか、先ほどお話にあったスチューデントシティですとか、あるいは中学校でのインターンシップとかというところで、確実に育っているところなのかなと思います。

た。ただ、その一方で、将来の夢や目標を持っているということは若干下がっているというところで、自分のいいところ、強みが将来の希望にもしかして少しつながらない部分があるのかなというところで、その部分がなぜなのか、あるいはどういう取組があるとそこがうまくつながっていくのかなというところがちょっと気になったところです。

それから、2点目です。私、英語の教員なので、国際的な視点に立った教育という部分も少し気になって見ておりました。小学校6年生の段階で9割もの生徒が英語の勉強の大切さを認識しているんですが、ただ、勉強が好きな生徒は6割ということで、逆に言えば、小学校6年生の段階で半数近くが英語嫌いになっているというふうにも見てとれるので、やはりそこがどうしたものかなという気がしています。さらに中学校の学びに入れば難しさも増していきますので、そこにやっぱりギャップがあるというところで、やっぱり早期に英語に触れる機会を持った意味が何か薄れつつあるのかなというところで、今度から国際的な視点に立った教育に力を入れていくというところで、このギャップをどのように埋めていくのかというところが非常に課題かなと思いました。

たまたま今週火曜日の日に都市立校長会の総会がさいたま市でありまして、その中の講演会で、前さいたま市教育長の細田眞由美さんの講演がありました。5年連続でさいたま市が全国英語力1位を維持しているというところで、そこに至るまでの取組等のお話があったんですが、かなり思い切った舵取りで、小学校から中学校へと一貫した指導の流れができていました。非常に興味深いお話で、もしかしたらこういうところが何かヒントがあるのではないかなと思って聞いてきたところです。

それから、最後です。(7)番に不登校というところの項目がありました。私も現在定時制高校にいるんですが、その前、教頭時代もたまたま定時制高校にご縁がありまして、今年で関わりが5年目になるんですが、やはり定時制高校に入学する生徒は小学校、中学校で不登校を経験した生徒たちが半数を超えるような状態です。ただ、その中で、高校に入ってから皆勤で卒業していく生徒、ほとんど休まないで学校に来ている生徒もかなりの数おられます。というところで、生徒たちが何か思いを持って入学してきたという部分もあると思いますが、それだけ不登校だった子たちが定時制高校で何とか学びにつながっているというところ、人数の問題とかもいろいろあると思うんですが、やはりどこか力はあると思うんですが、なかなか小学校、中学校で学校に足が向かなかったというところ、そういうところも何とかしていく方法はないかなと思っています。

あとは、逆に高校には登校しているんですが、義務教育段階の学びがほとんど身につけていないというところで、漢字が全く書けない生徒や九九も言えない生徒もいます。でも、必死に高校の学習についていこうと頑張っています。そういった生徒たちを見ていますと、何かすごく歯がゆいというか、そういう思いで日々生徒たちを見ています。

不登校の生徒たちは現実としてはどんどん増えているところもありますので、そういった子たちへの支援、教育というところも、やはり非常に大きな課題だなと日々思っているところです。

以上になります。

○菅澤委員 南小泉小学校の菅澤と申します。私は小学校教員なので、小学校の立場から思ったことをお話しさせていただきたいと思います。

3点あるんですけども、冒頭の教育長のご挨拶にもあった多様なニーズに応じた教育機会の確保という言葉がありましたけれども、多様なニーズというのはすごくいろいろあるかと思うんですけども、障害を持った子とか不登校の子とか外国籍の子、あとは家庭環境が少し複雑だったり配慮が必要な子と、たくさんいると思うんですけども、うちの学校にもそういったお子さんがいて、1年生でもそういった子たちが入学してきて、やはり一斉指導ではなかなか難しいなというところもあったんですけども、それなりのニーズを把握して支援すればみんなと一緒に活動できたりするんですよ。そこに至るまではすごくきめ細かに見て寄り添ってということで人手が必要です。担任がその子どもたちに接している間に、私が1年生の教室に入って絵本の読み聞かせをしたりとか、実際にそういったことをやっていて、何とか今できているかなというところで、今まさに期首面談の真っ最中なんですけれども、先生方の中には、これまでの教育に子どもたちを合わせようとするのはもう無理がある時代が来たんじゃないかということで、多様性をうたうのならば、そういった子に合わせた指導法を考えていかななくてはならないのではないかというような意見もありました。なので、ここで議論できるか分からないんですけども、そういった意見を大事に何か実践をしていきたいなと思っています。

2点目は、事務局に事前確認メモでも出したのですが、資料5の15、16、17ページの辺りだったと思うんですけども、本市の現状学力があって、小学校と中学校の比較があるんですけども、小学校は概ね全国平均で、中学校はもう少し高い、上位層の生徒が多いということがあって、何年間かこういう状況が続いていて、私は少し悔しいなと思って、小学校でも、こういったテストの結果が出るたびに課題分析して、どんな指導法がいいかというところでやっちはいるんですけども、なかなか効果が出ないのかなと思っていて、それではどういふふうに見たらいいのかお聞きしました。私は小学校と中学校の違いは専科かな、専科での指導が効果的のかなと思ったんですけども、事務局からは、小中9年間の積み重ねによる成果が表れていることや関係あるかどうか分からないけれども、中学校では教科の勉強が好きという項目が割と多い、全国より上回る、あとは授業中の私語が少なく落ち着いているという結果が上回るというのがあります。裏を返せば、小学校はその逆なのかなと、ちょっとうちの学校でも思い当たるななんていうこともありましたので、ちょっとそのあたり、もう少し注目していきたいなと思っています。

あと、3点目は、うちの学校では子ども会がないんですね。すごく皆様のご意見でも、地域との関係性がすごく大事だとか地域の力を学校にのよな話がたくさんあったんですが、まず子ども会がないと、地域の方も、何かしてあげたいと思っている方はいらっしゃるんですが、地域にどんな子がいてどんなニーズがあるかも分からないかということで、非常に運営協議会などで話題になっています。せめてPTAの活動として親同士のつながりをつくりたいなと思っているのですが、コロナ禍ですっかりそれも、力がなく、PTAもスリム化してこれまで、あまりPTA余計な事　　というか大々的なことはしない、したくないということで、それは何か企画すれば集まってくださる方は多いので、学年PTA行事もできなかったんですね。いろいろお願いしたけれどもなかなか実施できなかったんですが、もう学校が主体となってセッティングして、そこにのっかってもらうようなやり方で何とかやってみようということで今年取り組んでい

ます。そういったところで、学校・家庭・地域の連携をどのように持っていくかというのがすごく大きな課題となっています。

いろいろ勉強させていただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

○菅原委員 宮城教育大学の菅原と申します。よろしくお願いいたします。

私からは、ICT活用とか情報活用という点から意見を述べさせていただきたいと思っています。

ICT活用については、GIGAスクールの環境整備がされて5年たったんですかね、次の更新のタイミングがもう本当に目前というところなんだと思うんですけども、頂いた資料を拝見すると、この間、教員のICT活用指導力などが上昇傾向にあるというようなデータがございました。それはすごくいいことだなと思うんですけども、少し注意して考えなきゃいけないのかなと思うのは、1人1台端末を活用した授業というのがどういう授業が望まれているかという、先生が子どもたちに分かりやすく教えるための授業というよりは、もっとこれまでよりも子どもたちを中心に据えて、子どもたちの自己選択とか自己決定、それから多様で創造的な表現活動とか、あと考えの共有とか対話の機会ですね、先ほど遠藤委員のほうからもお話がありましたけれども、そういったことが大切にされて、子どもたちの学びがすごく自立的で探究的になっていくという、そういう授業が端末を活用しながら進められていくことが求められているんだと思うんです。なので、そういった求められている授業が実現されている中でこのICT活用指導力の上昇傾向と言えるのかどうかといったところは、少し吟味が必要なかなと思っています。

なので、今回の検討を進めていく上でも、私自身大切にしたいなと思っているのは、これから求められる授業の姿というのがどういうものなのかということと、これを具体的に描きながら、そういった授業を成り立たせるための学習環境、これはICTに限らないと思うんですけども、学習環境をどういうふうに整えていくのか、そういった視点を大切に検討していくということがすごく大事なかなと思っています。

これは自分の個人的な思いなのですが、それではこれからの授業というのがどういうふうになっていくといいのかなというのを考えてみると、1つは、やっぱり子どもたちの自立性を高めていくこと。そして多様性に応じること。3つ目に、探究の質を高めるということがあるんじゃないかなと思っています。この3つが大切にされた授業だったら、多分自然と1人1台端末でクラウドツールを、先生に言われて使うというのではなく、子どもたちがいつでも自然に使っていくことが、前提になっていくと思うんです。そうやって端末とかクラウドツールの活用が必然化していくと、当然そういったツールを使いこなして自分の学びに役立てていくためのその情報活用能力、情報を活用していく力というのも当然必要になるということなので、ただ道具を使うということじゃなくて、それを自分の学びに役立てる情報活用能力の育成のようなどころもすごく大事になってくると思っています。

中教審のほうでも、この情報活用能力については今、抜本的向上方策を検討することで議論が進んでいるので、仙台市においてもそういった観点から見直していくということはすごく大事なかなと思っています。特に、いろいろ多分議論が分かれるところ

だと思うんですが、生成A Iを教育にどのように利用していくのかとか、それからデータの活用みたいなどをどのように進めていくのかといったところも含めて、情報活用能力の育成をどのように進めていくのか、改めてこれまでの情報活用能力でいいのか、それとも捉え直しが必要なのかというところも含めて、考えていかなければならないのではないかなと思っています。特に、仙台市が国際の視点も大事にしながら、探究を進めていくということだと思うんですけども、そういった探究する力を支えるという意味でも情報活用能力はすごく大事になるものだと思うので、そのICT活用、情報活用能力の育成といったところも、検討を進める際に大事にしていっていただけるといいなと考えております。

以上です。

○堤委員 皆様、こんばんは。堤と申します。

私、この委員に市教委さんからお声がかかったのは、国際教育の面だということでございました。実は私自身は宮教でお世話になっておりますけれども、ずっと仙台市内の小学校を中心に勤務しております、小学校勤務時代に一度オランダのほうのロッテルダム日本人学校、それから、退職しましてからシニア派遣でシンガポール日本人学校のほうに勤めさせていただきまして、もう戻って3年ぐらいはたってしまったんですけども、そういう経験や、昨年度から日本語教師というのがやっと国家資格になったんですね。日本にいる外国人のこどもたちへの日本語指導ということで、そちらの登録日本語教師のほうも取らせていただいたものですから、そういうこともあって仙台の国際教育の推進、新しくすごくたくさんメンバーから出来上がったみたいですけども、そちらのほうの何かしらやられていることへの多少でもお役に立てればいいのかと思って参加させていただいております。

自分自身の経験、それからあとは資料等々を読ませていただいて一番感じるのは、特に、日本から外に出て日本を見ていると、隣にいらっしゃる菅原先生のICTが非常に進んだことによって、世界は今本当に誰でもどの国でもチャンスがある。それが何か大前提かなという気がしています。極端な話なんですけれども、例えば私がいたシンガポールなんかでは、実は15年前、20年前までは日本をものすごく目標としていて、追いつけ追い越せだったそうです。でも、今はもうがらっと変わって、もう自分たちで作り出していく。ですから、日本なんかもう、ここが目標というよりは、やっぱりこれからというのは自分たちでいかに新しいものをつくり上げていくかということが、いよいよますます求められていくのかと。それから、いろいろな国で、特に東南アジアが今一番熱いなと感じているんですけども、教育の分野でそういった人材を育てていこうというような、そういうような動きが見えてきているなということを感じたなと思っています。

そういうことを踏まえますと、先ほど遠藤校長先生のほうが、学校現場に、いろいろ新しいことを入れることへのハードルの高さ、それをすごく実は心配しているところもありまして、仮称ですけども国際探究科、今度新設されようとしているこの教科が、何をどのように入れていけばいいのかというのが一番のやはり課題ではないかなと思っています。そのときに、やはりこれは簡単に言えばグローバル人材を育てていくとい

うことにつながってくるのかなと思うんですけれども、1つは、グローバル人材とは何かといったときに、資質・能力というところで、文科省のほうでは次のように整理しているみたいなんですけれども、主体性とか積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感。でも、実はこれは別に国際をつけなくても、普通の授業の道徳であり特活であり、それから学校生活の中で身に着けていく資質・能力じゃないかなと思って見ておりました。ですから、こういうところを少し整理して、なおかつグローバル人材のためにこういう力が必要というところを幅広く、まさに探究だと思えるんですけれども、1つの教科ということではなくて、学校の中で学ぶ中で、そういう資質・能力を高めていく。それがまず1つ。

それから、2つ目は、やはり越坂先生が英語の先生ということなので、語学はやはりコミュニケーション能力を高めるために絶対に大切なところだなというふうには思います。とともに、言葉がしゃべればいだけということもまた違いますし、英語がしゃべればいかかといいますと、今度は、正直なところ、日本語教育をやっているとむしろ英語をしゃべれる方よりも、今、日本とか仙台に来ていらっしゃるのネパールとかミャンマーとかそういった様々な、どちらかというアジアとか、そういうところの方が多いいいことを考えますと、英語はもちろんですけれども、英語だけでなく、ある意味日本語も介したり、ある意味言葉だけではないところでも伝える能力のコミュニケーション能力、そういう力も育てていかなければいけないのではないかなと思っていました。

それから、3点目としては、環境を整えるということがやはり国際探究科、国際教育を推進していく上でも大切ではないかなと考えておりました。先ほどもこの資料の中に、英語は大切だと思うけれども、ただ、英語を使って自分の考えを伝え合う活動があったと感ずることが少ないというアンケート結果があったみたいなんですけれども、やはりそういう環境を整備していくということが異文化を理解すること。それから、もう1つは日本人としてのアイデンティティを気がつくということにつながっていくのかなと感じたところがありました。

とりとめのない雑然とした話になってしまいましたけれども、新しい新設される国際探究科というものが、ぜひいい形で学校現場の先生方にも有用感を持って広がっていくような、そんなふうになっていったらいいのかなということで、この委員会を通しまして一緒に勉強させていただけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○三浦委員 東北福祉大学の三浦です。よろしくお願いいたします。

私は2006年度まで仙台市教育委員会でお世話になっておりました、2007年度から大学のほうに移籍させていただきました。仙台市の教育に多少なりとも関わってきたかなと思うのですが、その中で今すごく懐かしく思い出していることがございまして、ちょうど私が教員で研究主任をしているときに、ちょうど週休5日制の、段階的に5日制に移行していったときで、いろんな研究とかやらせていただいていたときに、どのように学校の授業を組んでいくかとか、そういうところをすごく先生方とよく話していたなというのを思い出して、その頃、やはり5日制が始まる前の時期というのはものすごく私た

ち教員同士もよく話し合いをしたし、いろんなものを食べに行ったし、いろんな一緒に遊んだりとか、そういうこともやっていたなというのをすごい感じていて、今、私、教員養成に携わらせていただいている、卒業生の様子とかを見ているときに、なかなかそういう私たちが体験していた本当に対話のある教育現場とか、そういうものから、本当に忙しくてやる事が多くてというので、本当に大変だなということを非常に感じるようになりました。

それで、私、在職中には以前は文部省、それから途中から文科省に変わりましたが、そちらのほうに3年間、指導資料の作成等で東京のほうに行かせていただいたりという経験もあります。そのときに、指導要領を作成されている先生方が、私たちは指導要領をつくるから、三浦先生は自分の学級でこれを実現してくださいというのをすごいおっしゃっていただいている、私も社会科の授業がとても好きだったので、本当にすごくたくさん集中してというか、熱心にやっておりました。今、私が経験してきたそのような授業の面白さやつくる楽しさとか、それから、子どもと一緒にこういうのが分かったねというふうに感動したり、一緒によかったねと言える、そういう授業というのをどのようにして学生がつくり出していけるかというところを、大学の教員養成という立場で考えていかなければならないし、取り組まなければならないところだなと思っております。

そういう意味で、資料の6の2番の学校における働き方改革・魅力ある教職の実現というところに、非常に私自身ちょっとフォーカスして考えていきたいなと思っております。

大学の教職課程で単位数の削減というのが文科省からつい先ほど出たようなんですね。恐らく、これまで採用していただいた教員と、これからそういう削減の教職課程に入って教員になる先生方というのは、やっぱりいろんな点で違ってくるのかなと思います。すごく変化の激しい教育現場に対応できるように、大学としても本当に弘一先生おっしゃったICTの活用をどうするか、それから英語教育をどうやって学生に力をつけさせるかという、その現場に追いつくように一生懸命学生を駆り立てているような状態かなと思っていて、そういう中で、卒業生といいますか、学んだ学生が本当にいろんな自治体、仙台市とかいろんな自治体の中で自分の力を発揮して子どもたちの教育に当たれるような、そういう有為な人材にぜひなってもらいたいなと思いますし、そのために何ができるかというところを考えていきたいなと思っております。

それから、本市の現状のところの(16)の歴史・文化というところが私はとても関心がございまして、やはり仙台というのはすごく歴史が長く、由緒ある建造物とか、それから遺構もたくさんございます。一方で、ナノテラスのような最先端の科学、そういう議論が盛んに行われるという非常に大きな二面性のある、すごく魅力のある都市だなと思っています。その中で子どもたちが、やはりこの仙台で生まれ育ってよかった、そして、もしかしたら違うところに行くかもしれないけれども、やはりこの仙台で学んだ力というのをそれぞれの場所で発揮できるような、そういう子どもたちに育ってほしいなと思いますし、また、そのお手伝いができるように、この教育構想のプランに参加させていただいたということを大変光栄に思っております。

微力ではございますが、教員養成という立場、それから教員の経験もあったというこ

とで、それらを生かして先生方と一緒に学んでいきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

○若島委員 東北大学の若島と申します。

私は、委員長と同じ教育学研究科というところにいるのですが、心理学の人間であります。なので、不登校のこどもさんだったりご家庭であったり、そういうものの相談を受けたりとか、あるいは、私は家族とかそういうのが専門なので、夫婦関係とか親子関係とか、そういうのを専門としているわけですが、ちょうど去年、今年の3月ぐらいまで仙台市教員育成協議会でお世話になった方もいらっしゃいますが、いろいろ資料が出てきて、何か求められているもの、言葉、たくさんあり過ぎるように思います。書くのは書けるけれども、これ本当にやるのみたいな、そういう印象です。私、教育から少し外れている人間なわけですが、何かこういう資料とかを見ても、求められているものが多過ぎて、ぎょっとするというか、それが最初の、資料とかを見ての印象ということになります。

心理学の観点からいうと、何て言うのでしょうか、今日お話があったように、時代も変わったり、求められることが変わったり、でも、それは言ってみればソフトみたいな感じであり、コンピューターで言えばソフトみたいな感じです。それを、この体、ハードがあって脳があって、だから人間でいうと体のこういうハードみたいなもの、こういうものを何かうまく教育の中で発達させて、うまくいくような、何かそんなことを考えられたら、すごく抽象的で申し訳ないのですが、そんなことを考えられたらいいなと思います。どんどん、何を学ばなきゃいけないか、何が必要とされるか、これが変わってきてしまうので、その土台となるハードみたいな、何かそんなことを少し考えたのが1点ですね。

もう1点は、これも、先ほど自己肯定感ということもありましたけれども、私がカウンセリングなどをしているとき、こんなに何か自分のいいところがあると感じている子が多いんだと思って、結構衝撃があるぐらいびっくりしました。ああ、すごいなと。よかったと。未来が明るいと、そういうふうに思いましたね。やっぱりこういうところが大切だし、いろんなことをやっぱり乗り越えていくために前向きさみたいな、何かそんな、前向きに何か取り組んでいけるような、これはこどもさんたちだけじゃなくて先生もそうなんだと思うんですけども、何かそういうことを2点目として、あらゆる側面で考えられたらいいかなと思って、今日のところは資料を拝見させてお話を聞かせていただいております。

私からは以上です。

○議長 では、松田先生、お願いできますか。

○松田委員 どうもこんにちは。オンラインで大変失礼します。ありがとうございます。よろしく願いいたします。

私からは、資料6の6番目の生涯学習についてという視点から、少しでも仙台市との関わりということで述べさせていただきます。

幾世橋委員とご一緒させていただいたんですが、仙台市内各地にある市民センターですか、そちらの公民館運営審議会で大分長くお世話になりまして、どこも身近にある市民センターは現在財団が指定管理で運営なされて、そちらの運営の職員の方々も研修などでもいろいろお世話になっております。

1つ改めて感じているんですが、とにかく人に関わる仕事ですよ。例えば学校の先生、あとは人生の我々最後お世話になる介護の現場もそうですし、あと保育の現場もそうですし、具合悪くなれば医療関係もそうですし、そういった中で、やっぱり人生時間が長くなるということの中の特徴として、我々、例えば仕事を退職した後、でもまだ元気だから介護施設のお世話にまではまだならないと。特に、その間の学びの大切さといえますか、その受皿となっているのが市民センターであり、もちろん社会学級であり、様々な学びの施設がありまして、そこの職員の方々も本当に一生懸命なんですね。本当に頭が下がるような、学校の先生方も本当に一生懸命児童生徒さんの教育をされていらっしゃるって、それと同じように、成人の皆様方、大人の方々に対しても学習活動を支援されていらっしゃる。この在り方が恐らくますますさらに重要視されるでしょうし、特に、そうすると我々が全員当事者ですから、僕自身も含めて、じゃあどういふふうに何を学んでどういうふうに生きていいのかなということについては、まさに今こどもに求められるのと同じように、主体的で、あと孤立にならずに、いろんな方々にいかに声かけをして対話してと。そのところにやっぱり、いや自分だけでというだけじゃなくて、必然的に必ずその孫世代のためとか、こどもたちのために何かできないかねとか、何かしたいねというお話などが、いろんな場面でよく聞くんですね。そういったところで、例えばこども食堂支援とか、あと地域・学校の仙台版コミュニティ・スクールなどに対して地域の学校のこどもたちに何かできないかとか、なんていうふうなお話なども機運も盛り上がっているような状況をいろいろ拝見しています。

まさにそういったところで、大人の学びのほうから、またこどものほうにというような、そういった循環の流れがますます盛り上がってくるでしょうし、ぜひ仙台市の教育がそういったところの日本の長寿社会のさらに先端的にリードになっていくような取組になっていけば、そういったところに私も一緒に学ばせていただければありがたいなと思っています。ご指導よろしく願いいたします。

○本図副委員長 では、失礼します。皆様お疲れだと思いますので、皆様がおっしゃったことの全てそのとおりだとお聞きしておりました。

私は、その上で3点ございまして、1点目は、5年間の構想ですけれども、やはりその先の人口減少ですね、資源も縮小していく。仙台市は緩やかですけれども、宮城県を見ていると本当に恐ろしいスピードで、でも、そういったことを視野に学校づくりとか先生方の学び方とか、考えていく必要があるんだろうなということがあります。去年まで使えていたまち探検としての地域がもう使えない。中学校で1学校に国語の先生が3人いれば、学校の中でOJTが回っていくと思うんですけれども、これが1人とか2人になったらかなり教科の力は落ちると思うんですね。小学校も今や1学年2学級が大体標準になっているんですけれども、多分これでは先生のこどもを目の前にして力をつけていくというところでは相当きついと思っています。こういったことをいろんなことを

工夫して、じゃあどういふふうな先生方の学びと力をつけていくかということのを改めて考えていかなければいけないんじゃないかなと思っております。

2点目は、委員からもぽつぽつと話があったんですが、特に、アジアにちょっと出かけたりますと、本当にこの10年で、日本の貧しさというか、前は堤先生がおっしゃったように日本に追いつけなかったのが、もう今や目も向けられていないというか、例えばタイとかだつて、もう日本より私たちが上なんですけどという感じが漂つていて、シンガポールも本当にそんな感じで、私たちが子どもたちにつけた学力が、もっと社会の変革だとか、子どもたちが前に進んでいって社会の主人公なんだという、そういう、昔、村を捨てる学力つてあったんですけども、先ほどもお話があったように、若者が仙台から出ていくという話もそこに通じるものがある、ここでの話は特に小学校から高校までの学力になるんですが、仙台で働くことができた、あるいは、そうじゃなくても社会を変えていくような、そういう学力、学びということもしていかなきゃいけないんだろうという視点も、ちょっと大きなことを申し上げますけれども、必要なと思ひます。断片化された学力じゃなくて、本当に駆動する、つながっている、社会の改革になっていくような、そんな学力があつての今かというようにことを考えていく時期なのかなと思ひます。

3点目は、子どもたちが社会の変革に自己有用感とか自尊心とかを持てるということは、先生たちも同じで、先生たちが自分たちがこの社会、緩やかだけれども社会変革の一員なんだという、そういう自負を持っていただけるような生き生きとした仙台市の学校ということが大事じゃないかなと思ひます、そういう点では、私がここに席をいただいているのはいじめ関係だつたということがあるんですけども、いじめ、いじめと言うと先生たちの自己肯定感をとても下げると思ひます、例えば心理的安全という言葉に置き換えるとか、子ども間の包括的な人間関係とか、いじめが多くて駄目な都市というふうに映らないように、データを見ると上がつていくということはあるんですけども、実は、認知件数とかだと、どうして仙台だけこんなに真面目で多く統計を上げてしまつたんだろうというようにところがありまして、ほかの政令指定都市と比べると仙台だけというふうにちょっと見えちゃうところがありまして、そういったところも先生方の、本当に頑張つてくださつていふので、自己肯定感を上げるような施策の見せ方ということも、また考えることができたかなと思ひます。

以上です。

○議長 いろいろありがとうございました。本当に私自身も勉強になりました。

私からも少しだけお話しさせていただきますが、私は、秋山先生と一緒に特別支援教育、あるいは障害学のほう、障害学というのは発達障害等のある子どもたち等の関係でこういった場にいるのかなと思ひつつ、先ほど学習指導要領のお話もちょっと出たかと思ひますけれども、現行の学習指導要領というのは、小中高、あと特別支援学校あるんですが、基本的なつくりは同じなんです。もちろん後半のほうにいくと全然違うんですけども、総則の前の辺りの一番中核的な部分というか、基本的なつくりは一緒なんですよね。以前はそうじゃなかつたんですね。実は現行の学習指導要領の策定、私も実は関わらせていただいていたんですが、何でそういう形になっているかというのはご存じ

でしょうか。特別支援教育という言葉と、近年ではインクルーシブ教育という言い方をします。我が国のインクルーシブ教育を進めていくに当たって我が国がどういうことを考えているか。連続性のある多様な学びの場を用意するんだということを言っているんですね。これ、実は国際機関からちょっとクレームがついたこともあったんですけども、要するに子どもたちにとってその時点で最もその子のニーズに合っている場を用意していくということで、ただ、やっぱり従来の特別支援学級とか特別支援学校とか、一度そこに入ってしまうとそこでもう固定的、ずっとそこで生活していくというようなイメージがあったと思いますが、そういう形は取らないというのが今の考え方なんです。その時点その時点で一番いいところに移動していく、だから連続性がある。その連続性を保障するために、学習指導要領が基本的に一緒になくちゃいけないんです。つまり、全然違う学習指導要領で学んでいたら、別のところに行ったらそれまでのものと変わっちゃうので、子どもたち混乱しますよね。そういったことが背景には実はあったんです。これは特別支援教育に関する話なんですけど、でも、現在は本当にいろいろな子どもたちが多様なニーズを持って、本当に様々なオプションといいますか選択肢を多分求めているんだろうなと思います。

仙台市は、学びの多様化学校、あるいはステーション、様々な取組をされていて、子どもたちの居場所といいますか学ぶ場所というのは、学校の自分の教室だけではないということになっています。そういった形のものもどんどん取り組んできているかなと思います。そういった場で学ぶことというのが、ある意味、誰でもあり得ることだし、それは当然のことなんだよということが、子どもたちみんなの中に自然に入っていくといいなと思っています。

日本だけなのかどうなのか分かりませんが、みんなと同じということがとても大事にされている。それで子どもたちも何となくそういう意識を持っている。ただ、その幅がものすごく狭いと私は思っているんです。例えば、障害のある子どもたち、例えば車椅子に乗っている子どもたちに対しては、子どもたちはとても優しいんです。すぐサポートしてあげるとか、何かあったら助けてあげるということをすぐ行うんですけども、でも、例えば発達障害のある子どもたちに対してはものすごく厳しいんです。基本は何となく自分たちと同じところにながら何か外れる行動とか言動があったりすることに対して、それに対して、例えば先生があの子には注意しない、何で自分だけというような形で現れてしまう。この幅ですね。突出するとかいろんなことがあっても、そんなの当たり前でいいんだと、この幅が広がってくれば、その中にいろんな人たちを含めて考えていくことができる。やっぱり多様性と言ったらいいのでしょうか、これはそれこそ国際的なことにつながっていきますし、いろいろなことにつながっていくことなのかなと思います。それを何とか広げなければというのが、私がずっと思っていることです。

あと、勉強の仕方に関して言えば、実は、ある地域、自治体だと、先生が教えないという取組をしているところが実はあります。子どもたちが自分たちで学ぶ、先生はそれをサポートする。でも先生は決して楽ではない。いろんな準備を本当にたくさんしなくちゃいけないので。でも、そういった形で子どもたちが自分たちで学んでいくんだということをやっている地域も実はあったりします。そこまで思い切り舵を切れるかどうか

は分かりませんが、私も実は特別支援学校の先生と一緒に、ちょっとそういう取組はしたことがあります。そうしたら、やっぱり子どもたちの目が違う、それで取り組み方が違う。本当に自分たちでいろんなことを考えながらやっていこうとするようになって、それは本当にすごいなと思ったことがあります。ですので、今回は構想ですのであまり具体的なところには入り込まないかもしれないですけども、何かいろんな考え方、取り上げ方みたいなものをいろいろお聞かせいただければ本当にありがたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

用意されていた議事は以上でございますけれども、皆様から何かございますか。はい、よろしくお願いいたします。

○大曾根委員 時間のないところ申し訳ないです。

すごく皆さん、とてもいい話いっぱい聞けたなと思っていて、私も子どもたちの探究心が上がるってどういうことかなとちょっと思っていて、私はやっぱり学びの動機づけというか、義務教育なのでもちろん学習しなさいということなのですけども、何で学ぶのかって、これがすごく大事だと思っているんですね。そうすると、どんなデータがあれば、子どもたちは今勉強する意味、何で勉強しているのか、何に役に立つのかってちゃんと分かってやっているかがすごく大事だと思っている、そういうことが、例えば自分の学びには、このために学んでいるんだということが分かるような指標とかデータなどがあればすごくいいなと思っていました。それが、自分の学びの意味がちゃんと分かっているということが、例えば今から教育構想を進めていって将来伸びていけば、それは教育の成果があったし、探究心が伸びたなと思うんですね。そういった意味で、英語教育にとどまらず、この外国や自国文化の理解を深めるってすごく大切な思想だと思っている、ただ、英語を学ぶ意味って英単語を100個覚えることが目標とか、例えば英語のテストで100点を取ることが目標なわけじゃなくて、例えば、多文化とか異国の人たちの生活とか仲よくなる方法を知るといのが、やっぱり学びの意味だと思っている、そういうことをちゃんと理解して学んでいるかどうかという指標も何かあったほうがいいのではないかと少し感じました。

○議長 ありがとうございます。とても大事なことだと思います。

本題からずれているかもしれないし間違っているかもしれないのですが、結構、学んでバーチャルだったりすることが多いんですよね、バーチャルな形で学んでいくということが。でも、それを本当に現実世界と結びつけて考えていくという、そういった例えば授業だったり、何か取組の仕方をすると、やっぱり子どもたちの理解が全然違います。これも特別支援学校の先生たちと一緒にやったことがあるのですが、これも非常に感激したというのがあって、それを経て数年たったそういった子たちが、後輩に向かっていろんなことを実は語り掛けたりするんです、自分たちで。そんなことも起こったりするので、何かこれからも皆さんからいろんなアイデアを出していただいて、仙台市の教育が、子どもたち自身が本当に学ぶこと自体をいろいろ楽しんで、それをサポートし、教える先生たちも楽しんで、それを見ている親たちも楽しんで、それを見ている周りの人たちも楽しむという、そういう形にも教育の世界がなっていけばいいかなと思います

ので、ぜひよろしくお願ひしたいと思ひます。

ほか、皆さんから何かござひますか。

－質問・意見なし－

それでは、これから約8か月間、結構過密なスケジュールではござひますけれども、ぜひ忌憚のない意見をお聞かせいただければと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、私のほうはこれで終了いたしたいと思ひます。どうもありがとうございました。

8. 閉会